

県研究主題

家族の一員として生活をよりよくしようと主体的に工夫する能力や実践的な態度を育てる
学習指導と評価の工夫・改善

提案 1

提案者 蛭名 史絵（中地区）

<研究主題>

児童一人ひとりが、家族の一員として生活を工夫し、実践する態度を育成する指導法の工夫

1 提案内容

栄養素や3つの食品グループとその働き、栄養バランスのよい食事について学び、ご飯とみそ汁の調理実習を通して、基礎的・基本的な知識や技能を学び、食生活に関心を持ち、よりよい家庭生活の実践につなげ、生かしていく力をはぐくむことをねらいとした授業実践を提案した。

・ご飯・みそ汁作りを通して

事前アンケートで、朝食はご飯のみと回答する児童がいる実態を受けて、「ご飯・みそ汁作り」を通して、実の組み合わせ方や出汁のとり方、みその特徴、実の切り方について、家庭でのみそ汁の作り方を聞いたり、参考にしたりしながら、オリジナルのみそ汁を創意工夫し計画を立てることで、基礎・基本の定着を図り、和食への興味・関心を高め、家庭で実践しようとする態度につなげることをねらいとした。

(1) 実践的な態度を育成するために

ご飯とみそ汁作りを通して、日本の伝統的な食事について学び、実習を通して、出汁の風味などの新たなよさへの気付きが生まれた。このような実感が伴った体験を通して、「家庭で実際に作ってみたい。」という意欲の高まりにつなげることができた。

(2) 家庭との連携

学校での学習を生かして「実践的な態度」を育成するためには、家庭との連携が重要である。しかし、家庭環境が一人ひとりで大きく異なるため、家庭での実践をすべての児童が経験することは難しい状況である。学級通信での学習の紹介等を通して、家庭とのつながりを大切にしていこうように努めることも重要である。

2 協議内容

(1) 基礎的・基本的な技能を身に付けるために

一度の授業経験で基礎的・基本的な技能を習得することは難しい。そこで、授業で実践を重ねることや、家庭での実践により更なる技能の定着が期待される。配当時数との兼ね合いや、個々の家庭事情への配慮が必要となるが、繰り返し実習する機会をもつことができるとよい。

今回は、家庭科で2回、総合的な学習の時間でお米の収穫の際に1回、計3回のご飯・みそ汁作りができた。その中で、実の選び方は「栄養バランスはどうか」「おかずも考慮すると適しているものは何か」を考え、家庭で学んだ切り方を生かして実践した。

(2) 実習の技能評価

個人でみそ汁作りの計画を立て、実習ではグループ活動という授業では、ある人は切る、ある人はみそをとく、など活動が異なるために技能の評価が難しい。しかし基礎的・基本的な技能を身に付けるためには、個々に対する適切な評価が欠かせない。調理実習中の個々の技能の

評価のための例についていくつか提案があった。

① 一人が一つのみそ汁を作ること

どの児童もはじめから出来上がりまで通してみそ汁を作る「一人が一つのみそ汁作り」を行うことで、その児童の切り方、その児童の味付けがわかり、それに対する自己評価ができ、友達のものとは食べ比べることで友達からの意見ももらうことができる。

② はじめは決まった実で作り、2回目は創意工夫すること

確実な技能を習得させるために、系統性をもった指導を行う。一度目は決められた実、切り方を全員が行うことで、基礎的・基本的な技能の習得を図る。次からは、栄養バランスを考慮し出汁や実を工夫して作る。実を切り終えたら、それを確認する方法をとるなどして技能の評価をする例の紹介もあった。

3 まとめ

みそ汁という身近で奥深いテーマであった。みそ汁は日本人共通の財産である。また、ご飯とみそ汁作りは、学習指導要領で「米飯及びみそ汁の調理ができること」と唯一示されている献立である。

初めての5年生担任、初めての家庭科。児童の思いを大切にしながら、様々な角度から考え、挑戦した。児童のアンケート結果から、「朝食はご飯だけ」という児童が多くいることがわかり、それを受けての授業実践には、担任の「なんとかみそ汁を」、また、「朝食のみそ汁だけ」の児童には、「なんとかそのみそ汁で栄養バランスを」という思いが感じられた。

児童の思いを大切に作る姿勢をもって教師同士で議論を交わし、今後も研究を深めてほしい。

提案2

提案者 織井 美雪 (川崎地区)

<研究主題>

子どもがかわる 子どもがつくる 子どもが営む よりよい生活

— 家族の一員であることを自覚し、できることを継続して実践する態度を育むために —

1 提案内容

小学校の家庭科教育では、「家族の一員としての自覚をもち、生活をよりよくしようと工夫する能力と実践的な態度を育てる」ことをねらいとしている。自分の家族に好意をもつ子どもにとって、大好きな家族との関わりをテーマにした学習内容はすんなりと心に響き、豊かな心情や自発的な態度を育むことが期待できる。その反面、マイナスの気持ちを抱いている子どもにとって、自分の家族と向き合うことは容易なことではない。

そこで、どの子どもも安心して発言できる雰囲気を大切に、子どもの心を揺さぶる授業を展開したいと考えた。授業を通して子どもが自分の家族のよさを見付け、家族の一員であることを自覚し、できることを継続して実践する姿を育むことをねらいとして、6年『わたしのハッピープラン』の学習を行った。

はじめに2年間の家庭科の学習を振り返った後、「家族をテーマにした三行詩」を読み、自分の家族をテーマにした三行詩を作った。家族のつながりを深めるために、継続してできること『ハッピープラン』を一人ひとりが考え実践し、報告会を行った。

(1) ガイダンス『家庭って何?』の重要性

小学校入学頃からの自分自身を振り返りながら、これまでの学習や日頃の衣食住の生活が自分の育ちにどのように関わってきたかを考えた。また、家庭生活の中でできるようになったことを振り返り、それらは家族の理解や応援によって支えられてきたことを確認した。最終的に、これからの学習の見通しをもち、「なりたい自分」をイメージした。

学習の区切りの時期に、自分が立てた目標に照らし合わせながら振り返りを行い、自分の考えの深まりや成長への気付きを段階的に積み重ねていくことで、6年生最後の学習に向かって子どもの意識がより高まっていった。

(2) 子どもたち一人ひとりの心情を揺さぶる教材

「家族」に対してさまざまな思いを抱く子どもが学び合えるように、2・3時間目に使った「三行詩」の教材を時間をかけて吟味、精選した。三行詩との出会いをきっかけにして本音を語り、友達の意見をよく聞くことによって自分の心を少しずつ開いた子どももいた。これまでとは違う視点から「家族」を見つめなおすことができ、学びの変容が見られた。

(3) 家庭と連携した効果

保護者が家庭科の学習の意義や内容を理解できるよう、学級だよりを通して情報提供をしたり、家庭での実践に協力を依頼したりした。子どもが考えたハッピープランや実践の中間報告を掲載して、意欲が持続するようにした。保護者からの声を子どもに返すなど家庭と連携して子どもの取組を価値付けることによって、学んだことを家庭生活の中で実践する喜びやそこから生み出される家族との関わりの充実感、自己有用感を育むことができた。

2 協議内容

(1) 実践的な態度を育てる学習指導の工夫について

とれたボタンを自分でつけるなど、学習したことを生活に結び付けてほしいが、子ども任せにしては難しいところもある。ミシンで作品を作った後、どこかにボタンをつけるようにするなど、学習したことを再び使う場面を設定していくことで、実際に学習したことを使っていこうという気持ちが少しずつ生まれてくるのではないか。

今日学んだことをどういう場面でどのように生かすか具体的に発表させたり、実践の対象を家族に限らず地域にも広げたりなど、子ども自身が「やりたい」と思うような手立てをとっていくことが重要である。

家庭科の授業開始時に将来のことを考えさせて、それを実現させるために「今身に付けるべき技能は何か」という視点で学習していくことも、主体的な学びにつながっていく。

また、実践への意欲が継続するには、「わが家・身近な人ウォッチング」が有効。繰り返し周囲を観察して実践することで、「なぜ自分はそれをやりたいのか」という思いのこもった実践になっていく。

(2) 基礎的・基本的な知識・技能の確実な定着について

I C Tを有効活用したり、ペア学習で実習をしたりしていくことで、全員が「一人でできる」ことを大切にすることで力が付いていく。時には失敗をすることで、成功させるためにどのようにしたらよいか考えることが学びにつながっていくこともある。「これができたら先生を呼んでね」など、誰がどこまでできているのかをしっかりと把握することも有効である。

一人ひとりの家庭環境や技能に大きな差が出てきていることもあるので、確実におさえることはおさえつつ、子どもの思いや実態に寄り添ってカリキュラム・マネジメントをしていく必

要がある。

3 まとめ

- ・ 教員の思いと子どもの思いが重なっていた題材であった。自分の成長に目を向けさせ、2年間でできるようになったことを考えさせることで、ハッピープランについて自ら取り組んでいく学習になった。また、本音を言える学級経営ができていた。教員が一人ひとりの子どもを受けとめたいという思いが、この学習全ての根幹になっている。

小学校の家庭科で、技術だけでなく心情や態度を育むことが大切。教員自身の人間力を高め、ていくことが授業を変えていく力になる。

- ・ 「家庭科って楽しい」ということを大切にしたい。学習指導要領の改訂では、新しいことに目がいきがちだが、今までやってきた家庭科の中に大切な要素が入っている。家庭科から発信・共有していくものが重要になる。

様々な内容がある中で、「目の前の子どもに付けたい力は何なのか」を考えていくことを大切にしてほしい。

研究会を通じて、今後の家庭科教育に求められる視点

次の改訂の告示され、全面実施が32年といわれているなかで、現行において何が成果で何が課題なのか、各学校現場において実態を整理し、必要に応じた改善のマネジメントが求められる。

小学校家庭科においては、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、生活における自立の基礎を培うとともに、自分の成長を自覚し、家庭生活を大切にすること、家族の一員として生活をよりよくしようと工夫する能力と実践的な態度を育てることを重視して内容の改善が図られている。そのために改めて以下の3点を確認したい。

- ① 小学校と中学校の内容の体系化＝育てたい資質・能力
 - a それぞれの地域性、学校事情等を生かした「めざす子ども像」
 - b 実習の材料や作品のねらいの系統性の情報と研究
 - c 新設の五大栄養素の確認状況や材料の洗い方、生ものは扱わない確認（教科外も含め情報交換）
 - d 調理室の安全な使い方や、道具の管理のルールなどの共通認識
- ② 社会の変化に対応し子ども達が成人して社会で活躍する頃を想定した指導＝教科の特性と横断性
 - a 核家族、少子高齢化、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展、技術革新への対応
 - b 伝統や文化の大切さ
 - c 自分・家族・地域の安全への意識や自然災害への備え
- ③ 家庭生活を総合的にとらえることができるようにする視点＝指導計画・題材構成
 - a 家族の生活と関連させながら衣食住などの内容を取り扱うことを一層重視
 - b 消費と環境を同時に学ぶことの意味（消費者市民活動、持続可能な社会の構築）
 - c 問題解決的な学習のとらえ
(話し合わせれば良いのではない、頭の中がアクティブになるための土台づくり)